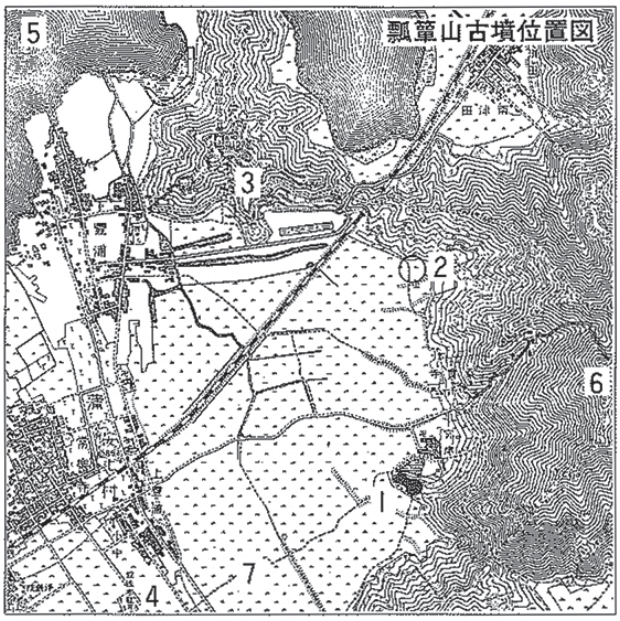
安土瓢箪山古墳

はじめに

瓢箪山古墳は、近江国のほぼ中央に位置する標高 433mの観音寺山、あるいは繖山とよばれる独立峰の一支脈尾根上先端部に所在する県下最大の前方後円墳です。

この古墳は、観音寺山からのびる小尾根の丘尾を切断して、あたかも、その尾根全体が人工的に盛り土した巨大古墳かのように築かれています。しかし実際は、尾根の上を巧みに削り出し、形をととのえて墳丘を築造した、いわば山丘利用の古墳なのです。古墳時代前期に築造された古墳には、このように丘陵や尾根を最大限に利用して、大きく、高くみせようとした古墳が多いのですが、瓢箪山古墳はその代表例です。



1．史跡瓢箪山古墳　2．近江風土記の丘資料館
3．特別史跡安土城跡　4．沙々木神社
5．弁天島遺跡(縄文時代)　6．史跡観音寺城跡
7．西才行遺跡(古墳時代前期)

明治28年発行　4万分の1

それにしても、このような地に、古墳時代前期に限定してみれば、近江国のみならず、近江国より東のいわゆる東国で最も大きい規模の前方後円墳が、どうして築かれたのでしょうか。

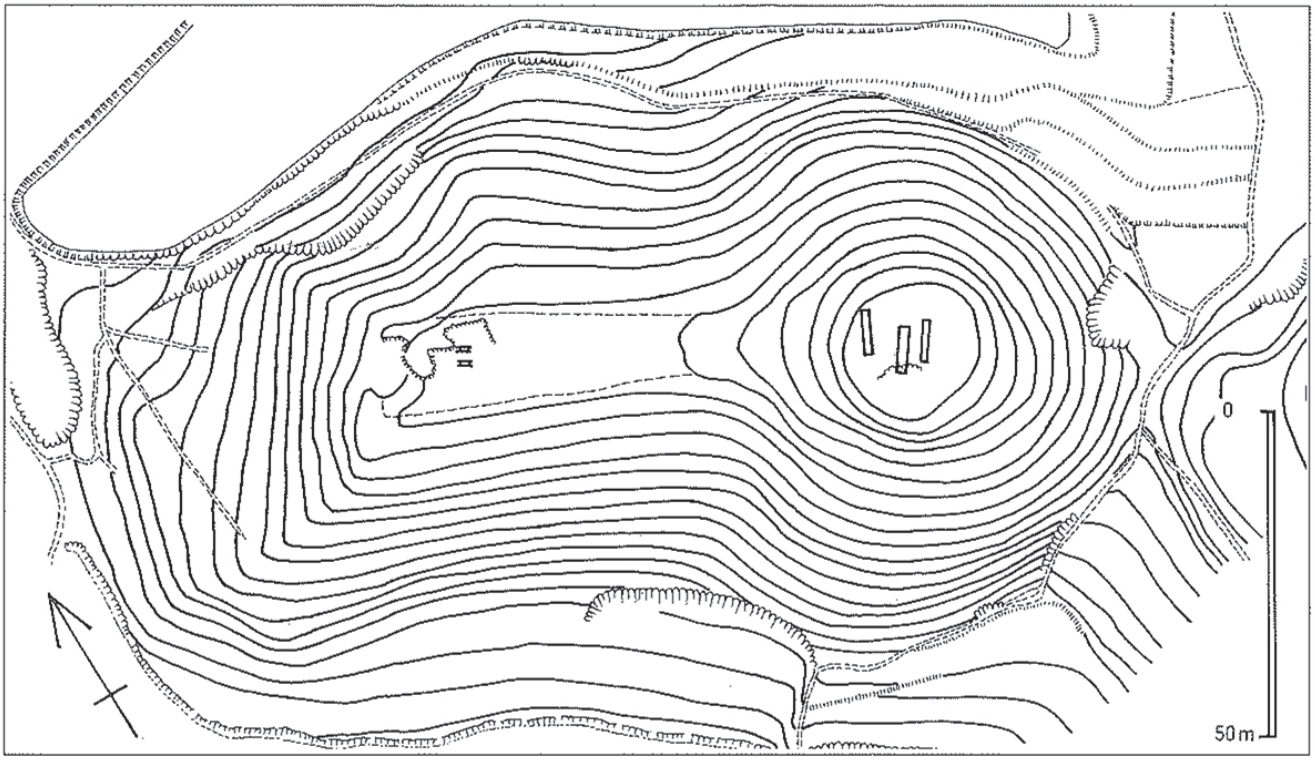
その理由には、いくつかの要因が考えられます。なかでもこの安土・八幡の地が、近江国でも有数の穀倉地帯であったことと、湖上交通・陸上交通の要衝に位置していたことの二点があげられます。特に、舟が唯一の大量輸送機関であった時代において、湖東平野に深く入り込んだ湖上交通の拠点たる内湖を支配することは、経済的にも政治的にも軍事的にも大きな意味をもっていました。しかも、瓢箪山古墳の足下には、東国への幹線道路である東山道が築造される以前の古道である「景清道」が陸上の交通路として存在していたとなればなおさらです。

墳　丘

瓢箪山古墳は、1935年(昭和10年)、地元の人が壁土をとるため、墳丘の一部を採掘しているうち、偶然、箱式棺と遺物を掘りあて、明らかとなりました。そして翌年、滋賀県史蹟調査会によって本格的な発掘が行われました。

当時の墳丘測量によると、主軸の全長は162mで、後円部の径90m、高さ18m、前方部の幅は70m、高さ15mであったとのことです。しかし、これは、丘陵の裾を墳丘の端とみなしたもので、実際に、前方後円墳として丘陵に手を加えた範囲は、もう少し小さく主軸全長 135m、後円部径74m、高さ13m、前方部幅56m、高さ7m程度ではないかと推定されています。

1988．6．30
財団法人　滋賀県文化財保護協会



瓢箪山古墳墳丘測量図（『県報第７冊』の図を一部改める）　前方部箱式棺の位置は推定

墳丘の斜面には、この付近にみうけられる割石を用いた葺石が全面に葺かれています。また、後円部の墳頂には壺形埴輪と特殊器台型埴輪が飾られていました。なお、墳丘の斜面下方に段状の平坦部がわずかに認められることから、当初は、段築をもつ二段築城であった可能性があります。

遺　構

遺構は、後円部墳頂に竪穴式石室が３基、前方部に箱式棺が２基の合計５基の埋葬施設が検出されました。そのうち、後円部の３基の竪穴式石室は、いずれも墳丘の主軸に直交し、北北東から南南西に方位をとり、前方部の２基は、主軸とほぼ一致する東南東から西北西の方位をとっています。

後円部中央石室

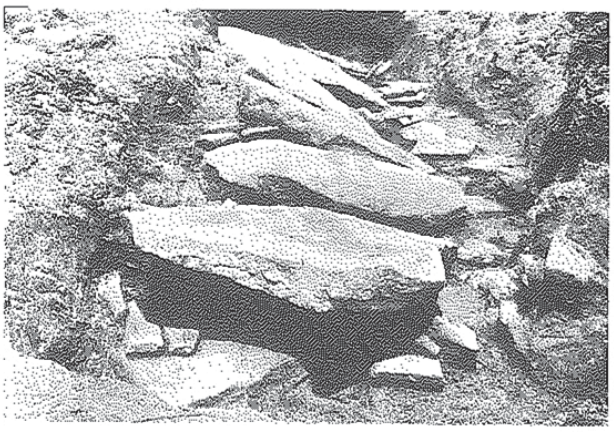
中央の石室は、全長6.66ｍを測り、幅は北東端で1.33ｍ、南西端で1.09ｍです。石室の四辺の壁は安山岩の扁平な石材を横に積み重ねた小口積みとし、上の方ほど石材をせり出す持ち送りの方法をとっています。このため、石室の横断面は台形となり、室の高さは床面から天井石まで1.09ｍです。石室の天井石は石英粗面岩の大石を９枚ならべかけておおい、合わせ目の隙間には、小さな石材をならべ、さらに全面にわたって粘土でおおい、一種の目張りとしています。

石室内は、ほとんど室内いっぱいに粘土床をしつらえ、その上に長い木棺を安置していました。木棺は、大木を刳り抜いてつくられているため底が丸くなっていますが、粘土床の形もそれにあわせて中央が弧状に凹んでいました。粘土床は、防湿効果を目的としたものですが、それだけでは不充分と考えたのか、その下に板石を置き、さらにその下に川砂利を４cm前後の厚さで敷き詰めていました。これだけのことをしたにもかかわらず、木棺自体は全く腐朽し、その痕跡すらとどめていませんでした。

なお、粘土床の四周の粘土が石室の下にまで広がっていることから、竪穴式石室は、粘土床が出来上ってから、それをおおうように築かれたとみられます。

後円部の他の石室

西北の石室は、長さおよそ6.96ｍ、幅は最も広い北東部で1.06～1.09ｍ、最も狭い南西



中央石室天井石

中央石室内粘土床

中央石室奥壁と粘土床

端で0.81～0.84mを測り、高さは0.90m前後です。石室は、塊状の割石を積み重ねて壁をつくっているため、中央の石室とちがって、面にかなりの凹凸が認められます。石室の下の地盤は、ゆるやかに凹み、この部分に厚く粘土を置き、粘土床をしつらえています。粘土床の上面は、細長く掘り凹め、横断面の形状は、安置されていた木棺の底部の形状を示しています。

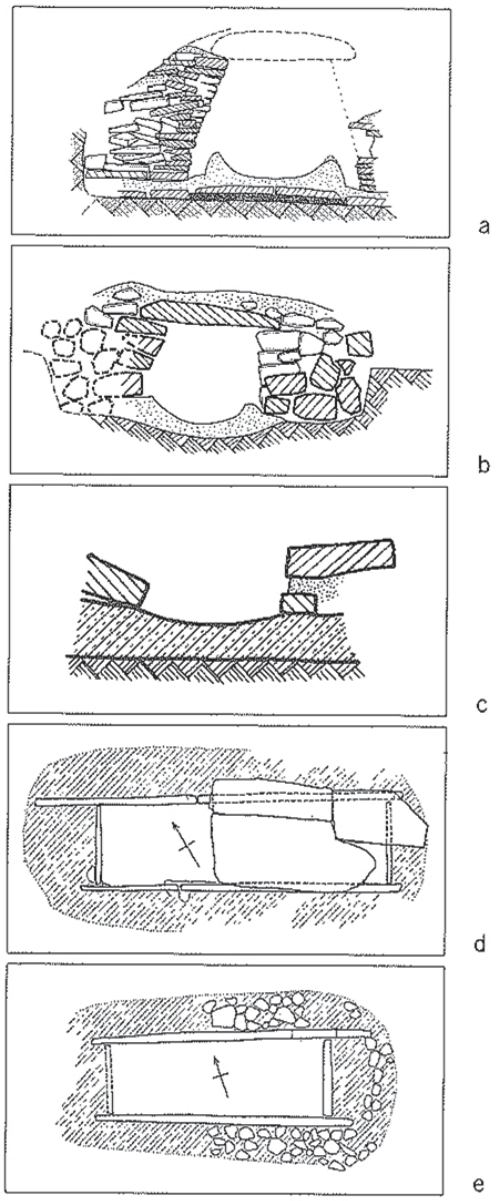
東南の石室は、全長5.75m、幅0.75～0.78mを測ります。石室の壁面の石材は、中央の石室に用いられた扁平な板石と異なり、この付近に見うけられる石英粗面岩ないし斑岩（はんがん）の小さな石塊で、石室は、これらの石塊を粗雑に積み上げ築いています。石室内は、平坦な地盤の上に厚さ0.18～0.21mの粘土をひいて木棺を置いていたことが、粘土の上面のゆるやかな凹みから知ることができます。

西北石室、東南石室ともに、中央石室と同様、粘土床をしつらえたのち、その規模に応じて石室を築いています。また天井も、大石を横にならべ、その隙間に石材をあてがい、上部を粘土でおおっています。

前方部の箱式棺

前方部上にならんで発見された石棺のうち北東棺は、古墳の主軸と一致し、東南東から西北西の方位をとっています。石室の規模は、内側の長さ1.81m、幅0.54～0.51m、高さは床面から0.45mです。床面には、厚さ0.06m前後の砂利が敷かれていたことから、地盤から天井石までの高さは、実質0.51mとなります。長辺の側板は、左右とも２枚からなり、短辺・木口板は、側板の内側に前後各１枚があてがわれています。天井石は、２～３枚からなり、側板の外方から天井石の上部にかけて粘土で固めています。また、石室の内面から床面にかけて、朱が付着していました。

南西棺は、北東棺とならんでおり、よく似た方位をとっています。石室の規模は、内側の長さ1.54m、幅0.57～0.51m、床面から天



石室図

前方部		後円部			
南西棺	北東棺	東南石室	西北石室	中央石室	遺構
一・五四	一・八一	五・七五	六・九六	六・六六	全長(m)
〇・五七～〇・五一	〇・五四～〇・五一	〇・七八～〇・七五	一・〇九～〇・八〇	一・二三～一・〇九	幅(m)
〇・五四	〇・四五	—	〇・九	一・〇九	高(m)
E—一八・五度—S	E—三〇度—S	(N—三二・五度—E)	N—二五・五度—E	N—二七・五度—E	方位
e	d	c	b	a	構造
なし	石釧三、勾玉三、管玉八、玻璃玉二〇程、丸玉三、土師器底部一	鉄刀、土師器壺	鉄製鈎状小金具二五～六、刀子一、鉄製鏃先二（ミニチュア）	鏡一、二、筒形銅釧一、二、鍬形石一、四刀鋸管玉二、車輪石短冊形鉄板一、短甲一、斧五、直刀二、鋸三、剣一、鉄鏃四、異形鉄器一、鉋一、	副葬品

井石までの高さは0.54m、地盤から天井石までの高さは0.65mです。長辺の側板は、左右各1枚で、前後の短辺・木口板もまた各1枚です。天井石は1枚、側板の四周は花崗岩からなるこぶし大の丸石と粘土で固めています。

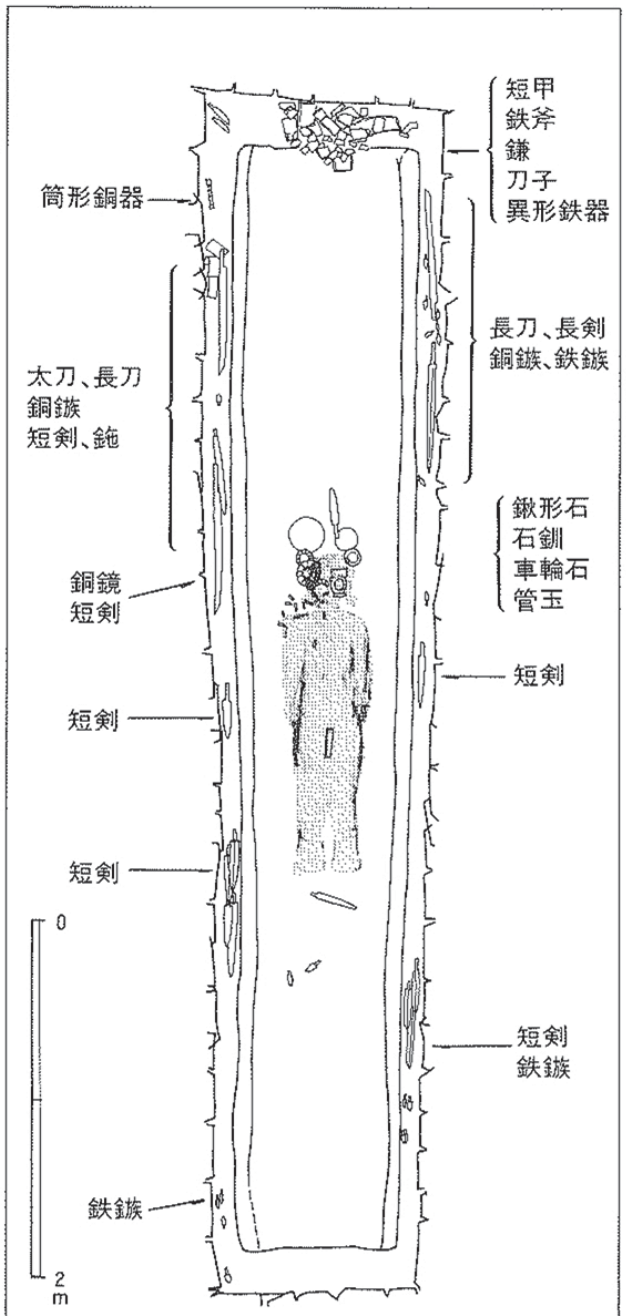
遺　物

遺物のほとんどは、後円部中央石室から出土しています。中央石室の遺物は、木棺内に納められていたものと、木棺外の粘土床上に副葬されたものがあります。

木棺内には、中央から北に寄ったところに朱の付着した顎骨の一部があり、付近に黒褐色の有機質と朱の薄い層がみられました。朱の層は、これより南西に1.5～1.8m程つづいています。この有機質と朱の範囲が死者の安置されていたところです。

遺物は、顎骨のあたりから下の、死者の頸筋にあたるところに20数個の管玉が、頭部の上方には、左右に各1面の銅鏡が、表を上にして副葬されていました。2面のうち右の銅鏡は舶載（中国製）の夔鳳鏡で、左の銅鏡は、仿製（日本製）の二神龍虎鏡です。頭部の左側には、石釧と車輪石が、右側には、鍬形石が置かれていました。頭部上方の銅鏡に接して短剣が1点そえられ、同じく脚部下方に相当する個所にも短剣が1点置かれていました。さらにその下方では鉄鏃が2点、死者の腰かその下に、細長い鉄板が1点置かれていました。

以上が、棺内に残された遺物のすべてです。



中央石室遺物出土状況

夔　鳳　鏡（舶載）

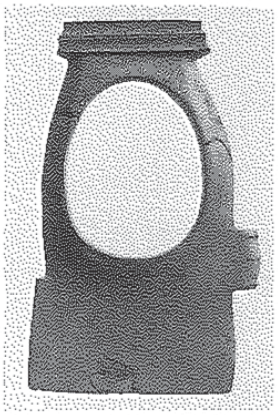
二神龍虎鏡（仿製）

頭部周辺の遺物は、宝器ともいえる呪具であり、頭上と脚下に配置した短剣は、魔除けのためのものといえます。

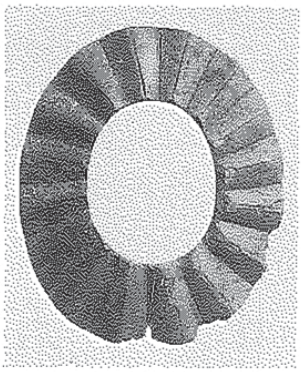
棺外の遺物は、石室の北東端の隙間にあたる頭部側木口部と、長側壁に面した細長い空間に認められます。頭部側の木口部棺外の遺物は、短甲(鎧)１、鉄斧７、鉄鎌３、鉄刀子５、異形鉄器が一括で、西側の長側壁には、上から筒形銅器とよばれる指揮棒、太刀、銅鏃、鉇４、長刀、短剣が、さらに南半部には、短剣３、鉄鏃が副葬されていました。一方、東側の長側壁には、同じく上から長刀、長剣、銅鏃が、中央部には鉄鏃、鉄剣が、南半部には短剣３、鉄鏃が副葬されていました。

棺外の遺物の配置は、木口部（北東端）を除くと、東西に意識して配列しています。死者の上方では、長刀、長剣、太刀、鏃を中心に置き、死者の両脇には短剣を、脚部の下方には短剣と鏃を置き、武器類によって死者の霊魂を守ろうとしています。

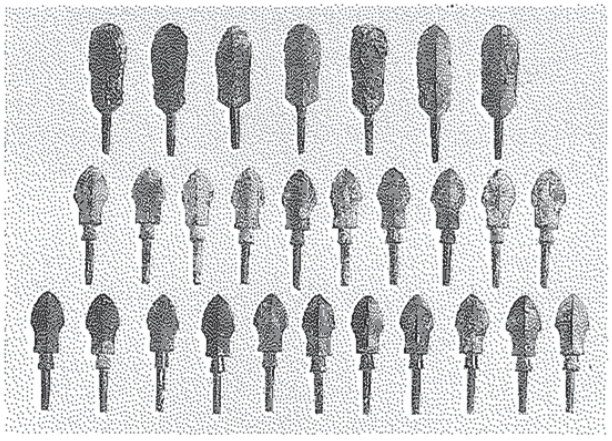
その他の遺構の副葬品としては、後円部墳頂の西北の石室からは、粘土床上面で、土師



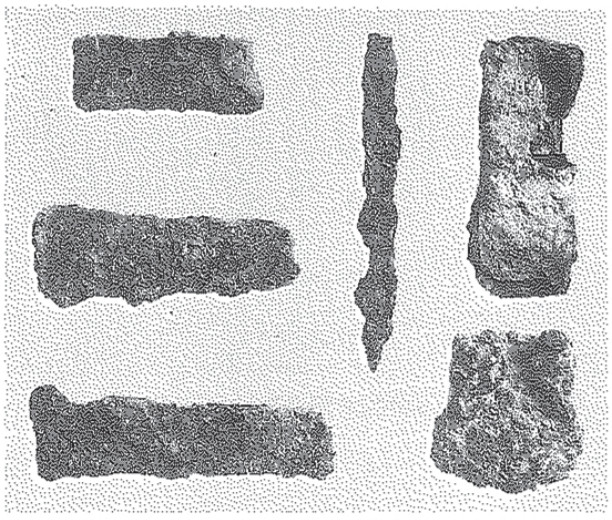
鍬形石



車輪石



銅　鏃



農・工具類

器の細片が、東西辺と側壁に沿っては鉄製の鈎状小金具と刀子、鉄製鏃先が発見されています。また南東の石室では、かって遺骸とともに鉄刀、土師器壺などが出土していますが、発掘調査では、土師器の小片が数点出土したのみでした。また、前方部墳頂の北東棺は、最初の発見時に石釧３、勾玉３、丸玉３、管玉８、瑠璃玉20前後と土師器の底部が出土しています。なお、南西棺には副葬品がありませんでした。

古墳の築造年代

古墳時代は、前・中・後期の３時期に区分されます。前期は、竪穴式石室や粘土槨が埋葬施設に用いられ、呪術的・宝器的な色彩の強い副葬品を多く含んでいます。これは、被葬者である首長の性格が、祭祀権をもった司祭者的なものであったためです。これに対して中期は、粘土槨がますます普及し、長持型石棺などが一部で採用されます。副葬品には、甲冑や刀剣、鉄鏃、馬具などの武器・武具類が多く、軍事的指導者の色彩が強く認められます。しかし、後期には、横穴式石室が普及し、それほど巨大な古墳は築造されず、群集墳とよばれる小古墳が、多数密集して築かれ、副葬品も須恵器と呼ばれる容器が中心となります。

このような三時期の区分の様相からみて、瓢箪山古墳は、前期古墳に属すると言えます。古墳時代前期の実年代は、３世紀後半から４世紀後葉までとされています。瓢箪山古墳は、中国製銅鏡を一面含んでいることや、車輪石、鍬形石などの副葬から、４世紀初頭から前葉にかけて営まれたものではないかと推測されます。

被葬者像

この古墳に葬られた中心人物は、後円部中央の竪穴式石室に納められています。その人物像は、頭部周辺の宝器類から司祭的性格を、頭部後方の冑や刀剣、鏃から軍事的性格を、また、鎌、斧、鉈などの工具から、大工、木工など山林資源の開発にも活躍した技術者的性格をもつものと予想させます。

安土を中心とする蒲生・神崎郡は、古代には沙々貫山君と名乗る豪族が勢力を振った地域です。古墳と文献にあらわれる豪族とを直接結びつけることは困難ですが、先に述べた工具類の副葬は、山君の職掌を暗示していて興味深いと言えます。（丸山竜平氏　提供）